
老人と犬

虹野 輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老人と犬

【Zコード】

Z5289J

【作者名】

虹野 輝

【あらすじ】

市民からの通報を受け、ある古い一軒家に辿り着いた高橋。そこに待っていたのはメスの柴犬だった。さらに、奥に進むと手紙を握つたままの老人の死体があつた。その手紙には禁断の真実があつた。美しくも退廃的な禁断の愛。

社会の闇に迫る異端小説。

平穏の秩序（前書き）

タブーに挑戦してみました。この作品はある意味僕の文学的実験作品です。

「パパいつてきます」

今日も赤いランドセルに黄色い帽子を被つた愛海が元気に学校に行く。彼女はオレの娘で小学3年生だ。オレはというと、5年前に妻を乳ガンで失くしてから、男手一つで愛海を育てている。そんなオレの仕事は市役所の職員。30歳過ぎのオレは市民から電話がかかってくると、市内ならどこへでもかけつけるのさ。お金を得るために、愛海を育てるために。

愛海を見送つたオレはいつもの通り自分の仕事場に行く。黒・赤・青様々な色のペンと黒い文字が煩雑した書類が散らかつたオレの机は妙に落ち着く。「一ヒーを飲みながら、オレは書類に目を通す。すると、電話がかかってきた。

「もしもし、こちら市民生活相談課の高橋です」

「あのう、うちの近所の家から動物の死体のような異臭がするんですけど」

声の主は40歳そこそこのおばさんって言つたところだらうか。とても不安げだ。

「わかりました。今からそちらに向かいますね。あなたのお名前は「斎藤です。早くしてくださいね。ホントあの家死体何だか不気味で」

オレは直ちに指定された場所に向かった。家が何軒も建ち並ぶベッドタウン。まだ昼間なのに、灰色のコンクリートで形成された無機質な街並みをオレは横切る。隣の住人は誰なのか、何を考えているかわからない。ただ、眠るために会社勤めを終えたサラリーマンが帰つてくるだけの冷たい街並み。そこに待ちかまえていたのは赤いカーディガンを着た小太り気味のおばさんだった。

「お待ちしていました。この家ですよ」

斎藤さんに案内された家は築40～50年は経つていて、古い木製の一軒家だった。黒い瓦と大人一人が横たわる位の狭いジャングルのような雑草だらけの庭。家自体も相当ボロイし、4、5部屋しかないような今にも壊れそうな二階建ての建物だった。

「じゃあ、私はここで。とにかく、この家の中を調べて下さい。恐らく、人とあまり関わらない身寄りがない遠藤さんっておじいさんが住んでいたようなんですけど」

「了解しました。ご協力ありがとうございます」

オレは何だかとてつもない嫌な予感がした。さっきから、魚が腐つたような、腐った生卵をぶつけられたような異臭がするからだ。もしかして、所謂、ゴミ屋敷つてやつか。

市民からの通報なので、オレは家の門を開けた。もちろん、古い家だからこそインターほんなんでもない。

「遠藤さん、遠藤さん」

家の閉じつけの悪い板戸の前でオレは叫ぶ。その家はどこの窓もカーテンがかかっていて、閉まっているようで中がどうなっているか分からぬ。オレは、鍵がかかってあるであろう板戸を押してみた。

「ガツシャン」

年季の入った茶色い木製の板戸は簡単に壊れた。玄関に入ると、ボロボロの靴箱やバラバラに砕けた緑色の壺が転がっていた。それに

しても、何の臭いだろうか。ものすごい異臭がする。それは腐った人の排泄物を直に鼻に押しつけられているような感触さえする。

「キヤン、キヤン」

奥の方から犬の鳴き声のような音が聞こえた。こんな家に人や動物なんているのか。

でも、かすかに聞こえる。オレは何かに引きつけられるようにその音のする方に向かった。床は穴だらけで、転びながらもオレは前に進む。すると、彼女がいたのだ。

彼女はメスの柴犬だった。稲穂のよつた黄色い色をした彼女はこつちを見て嬉しそうに尻尾を振っている。ただ、不思議なことに彼女の牙は赤いのだ。何かの肉にありついたのだろうか。

彼女がいた部屋は台所のような部屋だった。長い間使われていなければ、薄銀色の水道の蛇口と埃をかぶつた白い食器がこの部屋が長い間使われていないことを証明しているかのようだ。そして、所せましと散らかっているコンビニの弁当とカップ麺の容器はまるで地層を成しているかのようだ。オレはたまらず鼻をつまんだ。なんでこんなところに犬がいるのだろうか。どこから迷い込んだらうか。何をこの犬は食べてきたんだろう。ただ、この犬の毛並みはまるでアラビアの絨毯のように美しかった。オレは無性にこの犬を撫でたくなってきた。

「おいで、こっちにおいで」

オレが声を出すとこの犬は近づいてきた。彼女を抱きしめた時の感触はまるで娘の愛海を抱きしめたような温もりを感じだ。

「よし、いい子だ。お前はどこから来ただんだ」

オレは何となく彼女に聞いてみた。すると、どうだろう。彼女はオレの手から離れ歩き出した。どこか連れて行きたいところがあるのだろうか。

彼女は台所の隣にある居間のような部屋にオレを連れて行つてくれた。そこで、オレは信じられない光景を見てしまった。異臭の根源はココにあつたんだ。

老人の死体だ。埃まみれで薄黒くなつたちやぶ台の下に彼が横たわっていた。夥しい量の黒いハエやウジがたかつていて、何より、白いシャツは裂け、赤黒い肉の間から骨が突き出ている程、腐食が進んでいる。空腹のあまりあの犬が食べてしまつたのだろうか。犬の歯形のような傷がある。しかし、禿げかかった白髪の老人は顔だ

けは腐食せず、まるで母親に抱かれて眠るように安らかに死んでいる。何かに満足しきつたような平穏な表情だ。彼は孤独死しているのに。

彼女はオレをビックリ悲しげな眼でオレを見つめている。しかし、オレは一刻も早くこの悲惨な光景から立ち去りたくて仕方がなかつた。とにかく、部屋が暗いからカーテンを開けよう。カーテンを開けると鮮やかな午後の日差しが部屋に差してきた。オレは気づいてしまつた。老人が手に封筒のようなものを握つていていた。

オレは鼻を摘まみながら、その封筒を老人の手から離した。この手紙には何が書かれているのか気になつて、惹きつけられたからだ。中を見ると、真っ白な紙に何やら長い文章が何枚にも渡つて書かれている。本来なら、最初に警察を呼ぶべきでなのしれないが、オレはこの手紙を夢中で読んでしまつた。

この手紙を読んだ方へ

はじめまして私は遠藤雄一と申します。今、わずかな期待を込めてこの手紙を綴っています。私は定年退職した8年前まで高校で国語を教えていました。いつも生徒達から笑顔をもらつた充実した教員生活でした。

しかし、退職した直後に妻を交通事故で亡くしました。私の妻である聰子は一人で買い物に行くと伝えたのを最後にトラックにはねられて死んだのです。黄色いエプロンを着た聰子はズタズタに皮膚が裂け内臓が飛び出て、目も当てられない亡骸になつて我が家に帰つてきました。私は心の底から泣きました。今まで、子どももできず、ただ、私の帰りを待つだけの聰子に何もしてやれなかつたです。私は自分を責めるしかなかつたのです。

それから、身寄りのない私は孤独な生活が続きました。毎日、家に籠り、酒を飲むだけの毎日。そんな生活が数年続いたある日。私は運命の出会いをしたのです。それは夕方、私は酒を買いに、スーパーに買い物に行こうとした時のことです。しかし、その日は工事があつて仕方なく聰子がはねられたあの道を通つたんです。そこに子犬が捨てられました。

”誰か拾つて下さい”と書かれた白い紙が貼られたみかん箱の中に彼女はいました。煤を被つたように汚れた彼女は私を幼い子どものような澄んだ瞳で見つめるのです。これは運命だ。私は何かを悟りました。だから、その子犬に妻と同じ聰子と名づけ育てたのです。

彼女との出会いは私に光を与えてくれました。私は酒を飲むのを辞め、彼女との生活を楽しみました。私が微笑むと、彼女は尻尾を振ります。彼女の尻尾は天使の羽。私を幸せに導いてくれました。まるで、本物の聰子がいるように。

犬の聰子が成長するにつれ、私にはよくわからない抑圧された感情が芽生えました。それは本物の聰子との間に子どもができるなかつたからなのでしょうか、それとも、今まで寂しさに埋もれていた私が隠していた本能なのでしょうか。そもそも、私は教師。一度も生徒に対して、そんな感情は抱いたことはありませんし、それは聖職者としてあつてはならないことです。

しかし、私の抑圧された感情は寂しさと反比例して積つていくのです。コップから溢れた水は決してもとには戻りません。私は犬の聰子が本物の若き日の聰子に見えてきたのです。ついに、私は抑圧された感情を彼女にぶつけることになりました。

無意識に下着を脱いだ私は本能のまま犬の聰子に馬乗りしました。それは禁じられた行為だと知っていますが、この感情は抑えられなかつたのです。聰子もビックリしたようで、私の腕に噛みつきました。しかし、腕から流れていく血を見て私はさらに興奮しました。時を越え、聰子と一つになれた達成感と共に雷に打たれたような快感が私を襲いかかりました。

それから私は毎日のようにこの行為を続けました。本来なら、自身の人を前にしても不能なのに、聰子を見ると私は若き日の自分にタイムスリップするのです。だが、そんな幸せな生活も長くは続きません。私は医師から心臓の病を患つたことを宣告されました。つまり、いつ発作で死んでもおかしくない状態なのです。

だから、この手紙を残すのです。私が死んだら、聰子はどうなるのでしょうか？私が愛した聰子は？これを読んだ方はどうか私が死んだ後の聰子を助けて下さい。一生のお願いです。

この手紙が、私の思いが、あなたの心に届くように願っています。

手紙を最後まで読んだオレは今まで感じたことのない嫌悪を感じた。それは幼い頃、トイレに起きたオレが本能のまま寝室で抱き合う両親を目撃してしまったような言葉にはできない感覚だ。それでも、老人はどれだけ孤独だったのだろう。彼は苦しみながらも一匹の犬を心の支えとして生きてきた。

だが、腐食するまで誰にも見つけてもらえない孤独死だった。家族や友人がいれば早く発見してもらえたのに、赤の他人のオレが発見することになってしまってなんて。しかも、あんなに愛した彼女まで最後には主人の肉を喰らい、命を繋いでいる。実際はこの犬は老人のことを単なる虐待者としか思っていないかもれない。

今は秋だからいいものの、夏だつたらさらに腐食が進んで目も当てられないだろうな。オレはそんなことを考えると、部屋の中だと言つのに構わずに嘔吐してしまった。そんなオレを見て、彼女は尻尾を振りながらオレにすり寄つてくる。

「やめろ！」

オレは力任せに彼女を払いのけた。彼女は今度は齎えたようにオレを見つめるのだった。とつとと、携帯で警察に電話をかけてしまもう。

早く家に帰りたい！オレは何だか愛海の顔が見たくてたまらなくなつた。

安息と「うなぎの欺瞞」

何とか、警察の簡単な聴取を終え、オレは家に帰った。そして、老人の死体もあの犬も警察によつてどこかに運ばれていつたようだ。

「パパおかれりなさい。何だか今日、顔色悪いね」

「ただいま。今日はちょっと仕事が忙しくて」

「何だか今日のパパ変な臭いするよ。お魚屋さんの臭い」

「そうかな。じゃあ、先にお風呂に入るね」

オレは風呂に入つたが、後味の悪い手紙が頭から離れない。あの犬はどうなるのだろうか？殺されてしまうのか？オレが引き取ると言え、助かるのだろうか？そんなことを考へると、気持ちが悪くなり、オレはまた排水溝で吐いてしまつた。吐いて、吐いて、記憶まで吐き出せたらなとそのときはひたすら願つた。

風呂から上がると、リビングにあるガラスのテーブルの上に缶ビールが置いてあつた。

「パパ。これ飲んで、元気出して」

オレは黒いソファーにもたれながらビールを飲む。

「バカヤロー」

唐突にオレは叫んだ。

「パパ。どうしたの」

不思議そうな顔で愛海はオレを見つめる。愛海はいつかオレを置いて、誰か知らない男と結婚するだろう。もしかしたら、オレも孤独死する日が来るかもしれない。だけど、オレの心の支えは愛海に他ならない。愛海が可愛いから、愛海の笑顔を見たいから、愛海を守りたいから、オレは今を生きている。これは老人が犬の聰子に描いていた感情と同じなのかもしれない。

「パパは大丈夫だよ。それより、愛海は将来どんな仕事に就きたいの」

「パパのお嫁さんに決まつてるじゃん。パパと結婚したい」

「本当?パパも愛海とこのままずっと一緒にいたりいな
オレは愛海を強く抱きしめた。」

安息とこの本の欺瞞（後書き）

純文学とは何か？

そんな問いかけをこの作品で実験してみました。

今後の創作活動のために感想など気軽にお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5289j/>

老人と犬

2010年10月28日03時58分発行